

熊本県立装飾古墳館

研究紀要

第12集

幾何学装飾絵柄とは何物か－菊池川流域の装飾古墳伝統の成り立ち－···1
装飾古墳館 館長 木崎康弘

熊本県内に残る津波碑の悉皆調査の取り組みについて 九州国立博物館と九州・
山口ミュージアム連携事業「みんなをまもるミュージアム」の2年間···11

装飾古墳館 学芸課長 坂口圭太郎

平成27年度熊本県立装飾古墳モニタリング報告15
装飾古墳館学芸課 福田匡朗・坂口圭太郎・伊藤幸子・菊川知美

平成27年度熊本県立装飾古墳館で開催した企画展.....20

研究紀要

第12集

2016.3.11

熊本県立装飾古墳館

幾何学装飾絵柄とは何物か

一菊池川流域の装飾古墳伝統の成り立ち一

装飾古墳館 館長 木崎康弘

1 はじめに

菊池川は、阿蘇外輪山の北ノ岳（1041m）南麓を源流となし、有明海に注ぎ込む県内有数の河川である。その間の71kmには、風光明媚な菊池渓谷（上流域）、米所として名だたる菊鹿盆地（中流域）、広大な干拓地を取り込んだ玉名平野（下流域）が広がっている。その流域面積は、996km²と、球磨川（1,880km²）、綿川（1,213km²）に次いで広い。

この流域には、熊本を代表する古墳が數多くみられる。殊に著名なのが、銀鏡銘太刀などの出土品が国宝に指定されている和水町江田船山古墳だろう。また、玉名市福崎山古墳（約110m）や山鹿市岩原双子塚古墳（107m）、玉名市天水大塚古墳（約100m）など、100mを超える「大な前方後円墳も存在している。まさに往時の勢いを今に知ることができる地域なのである。

また、装飾古墳のメッカとしても、広く知られている。熊本県立装飾古墳館の調べによると、装飾古墳は、全国に660基確認され、その中の195基が熊本県内に分布し、さらにその中の117基が菊池川流域に集中している。その割合は、熊本県の60%、全国の約18%となっている。

それほどの数を誇る、菊池川流域の装飾古墳であるが、そこに描かれた装飾絵柄¹は、色鮮やかな円文や三角文など、実にシンプルである。ただし、言葉を換えると、現代にも通じる、高いデザイン性を持った絵柄、とてもいえるかもしれない。

ところで、菊池川流域に最初に前方後円墳が現れたのは、玉名市山下古墳や天水大塚古墳など、4世紀中頃のことだったらしい（杉井2014）。県内最古の古墳、3世紀末～4世紀初頭の宇土市城ノ越古墳（宮澤1967、杉井2014）から遡れること、およそ約半世紀後のことだった。その後、5世紀の中頃には、下流域の最奥部に和水町虚空蔵塚古墳（木村2014）が、中流域に岩原双子塚古墳（木村2014）が、支流の合志川流域に熊本市植木町高熊古墳（木村2014）などが造られていったという（高木2002）。

その後に登場したのが、6世紀初頭の和水町塙坊主古墳や、前半の山鹿市チブサン古墳、玉名市大坊古墳等、円文や三角文の装飾絵柄によって構成された装飾文様²の装飾古墳だった。いずれも前方後円墳で、5世紀代の文化層の後繼者が新たな伝統・文化を受け入れたことを物語っている。菊池川流域の6世紀代を彩った、装飾古墳伝統³の萌芽がそこに見出せると思われる。

そこで本論では、熊本の装飾古墳の変遷研究の中で最も優れた高木正文氏の変遷案を下敷きにして、菊池川流域最古の塙坊主古墳の装飾文様がどこから来るのかについて検討を加えたい。そして、菊池川流域の幾何学装飾絵柄の特質を明らかにする足掛かりともしたい。



図1 装飾古墳の分布
*高木正文氏作成の分布図(高木1999)を基に作成。

第八代海地域

環八代海北岸周辺

宇土半島

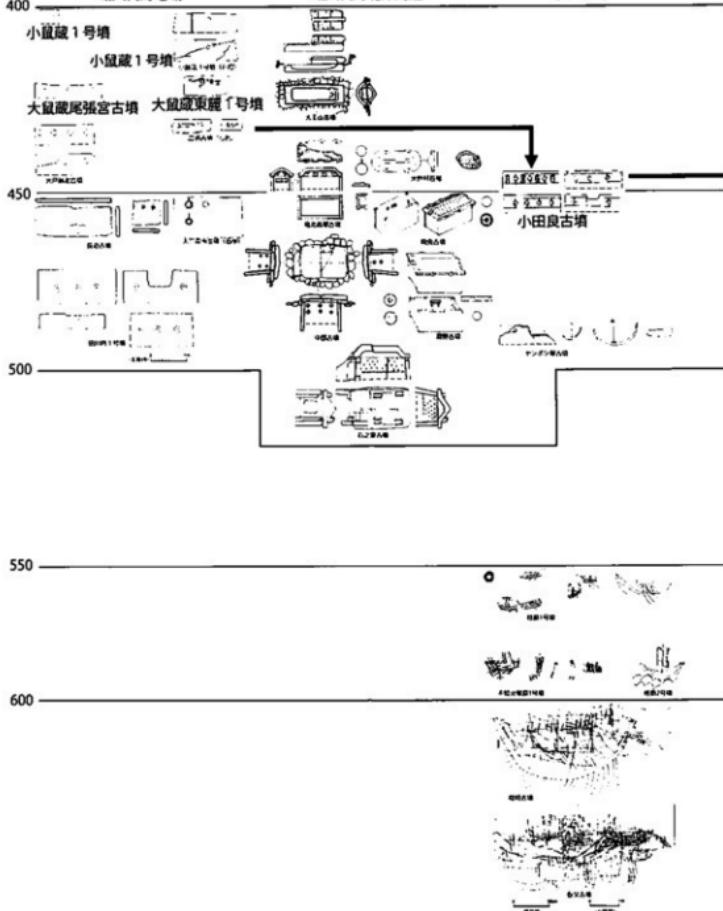
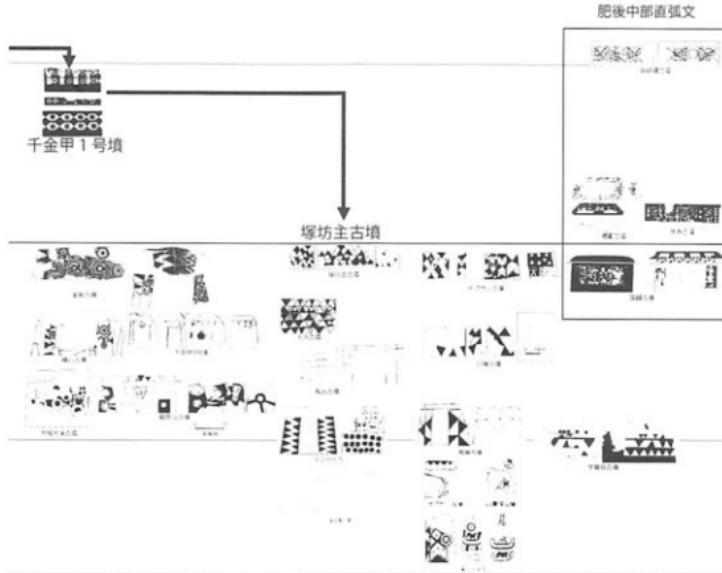


図2 装飾古墳縄年図

*高木正史氏の地域別縦年図を統合整理。



2 熊本の装飾古墳の編年と幾何学文の成立過程

(1) 熊本中・南部の装飾文様の遅り変わり—高木正文氏の研究から—

熊本県内の装飾文様の移り変わりについては、高木正文氏が高い見識を披瀝している（高木 1999）。それは、起步時点での到達点である。そこで、その概要の紹介から始めたい。

熊本県内の装飾古墳の分布を見ると、県北部の菊池川の中流域と下流域、県中央部の熊本平野北半部と宇土半島から緑川流域、県南部の八代海沿岸部と球磨川中流域に集中していることがわかる（図1）。これらの中で、最初に装飾古墳が登場する所は、八代海沿岸部だという（図2）。円文の装飾絵柄がある八代市小鼠藏1号墳（弊穴式石室）や同3号墳（石棺）がそれで、5世紀初頭と考えられている。またそれに続く年代の八代市大鼠藏尾張宮古墳には円文があり、八代市大鼠藏東麓1号墳の棺材には、円文の他に、弓や轍、三角板頭留短甲、太刀が描かれていた。

八代海沿岸の装飾文様を受けて、5世紀中頃に成立したのが、宇城市三角町小田良古墳の装飾文様であった（図2）。石室構造は初期の石障系横穴式石室で、奥壁の右隣に円文、盾、轍を配置した浮彫が見られ、その他の石障には、円文の浮彫があった。これらの装飾文様は、大鼠藏東麓1号墳の轍、円文などを付与させ、大鼠藏尾張宮古墳のように整然と均等に配置させたものだった。このことは、小田良古墳の装飾文様が八代海沿岸の装飾古墳の影響を受けて成立したことを物語っている。

5世紀中頃の小田良古墳の装飾文様を踏襲したのが、5世紀後半の熊本市千金甲1号墳の装飾文様であったという（図2）。石障系横穴式石室の奥石障には、轍2段の円文と、轍と轍2段のX字文を重ね合わせた文様とを交互に配置した装飾文様が見られた。さらに、左右石障には、轍2段の円文と轍2段のX字文を交互に配置した装飾文様があった。円文と轍をモチーフにした装飾文様という点では、小田良古墳の装飾文様を踏襲したことは明らかである。

(2) 熊本中・南部での幾何学文発生の過程

高木氏によれば、菊池川流域の装飾古墳は、千金甲1号墳の装飾文様を受けて成立するのだという。塙坊主古墳がそれで、チバサン古墳や大坊古墳がそれに続くものであるが、その足取りを具体的にどのように整理できるだろうか。そこで、(1)で概観した内容を装飾絵柄のデザイン性から再度見直してみよう。

①八代海沿岸の装飾文様にみる貝象絵柄の特徴

八代海沿岸の装飾古墳は、貝象性のある装飾絵柄（以下「貝象絵柄」という。）が特徴だ。小鼠藏1号墳や同3号墳、大鼠藏尾張宮古墳の円文（図3）は、白石太一郎氏の指摘にあるとおり、鏡の表現で、貝象絵柄と評価できる（白石 1993）。また、大鼠藏東麓1号墳の棺材には、鏡の他に、弓や轍、三角板頭留短甲、太刀が線刻で表現されていた（図3）。因みに、鏡や太刀などの表現は、上天草市の広浦古墳でも見られるものである。

そこで、これらの装飾古墳の貝象絵柄がどのように配置されているか、その配置のされ方がどうなのか、さらには描画方法がどんなものなのかについて検討したい。

配置では、均等配置のものと、そうならないものがあったようだ。例えば、均等配置の例は、鏡3個が配置された大鼠藏尾張宮古墳の装飾文様（②）である。これに対して、均等配置とはならないのが、鏡1個だけの大鼠藏1号墳（①）と、1個（③-1）と3個（③-2）の鏡が別々の石材に表現された小鼠藏3号墳の装飾文様である。

次に、配置のされ方を見てみよう。大鼠藏尾張宮古墳の装飾文様は、石障石材の、緩くカーブした上縁に沿わせて鏡3個が配置された、横並び配置であった。鏡の配置は、カーブに沿っているので、緩いカーブを描いていた（②）。大鼠藏東麓1号墳の装飾文様も、それぞれの装飾絵柄の上端を描えた、横並び配置であった。鏡や弓、轍、三角板頭留短甲、鏡を垂らした太刀が、直線的な石材上縁と平行に配置されていた。緩いカーブと直線の、異なった配置の、二つの古墳ではあったが、そこには、石材上縁の形状に規制されるという、共通した要因があったようで、そこには、彫り手の意図⁴、つまり構図性が読み取れない認識したい。

また、貝象絵柄の描画方法では、一部に浮彫的な彫り出しもあるが、基本的には線刻であった。

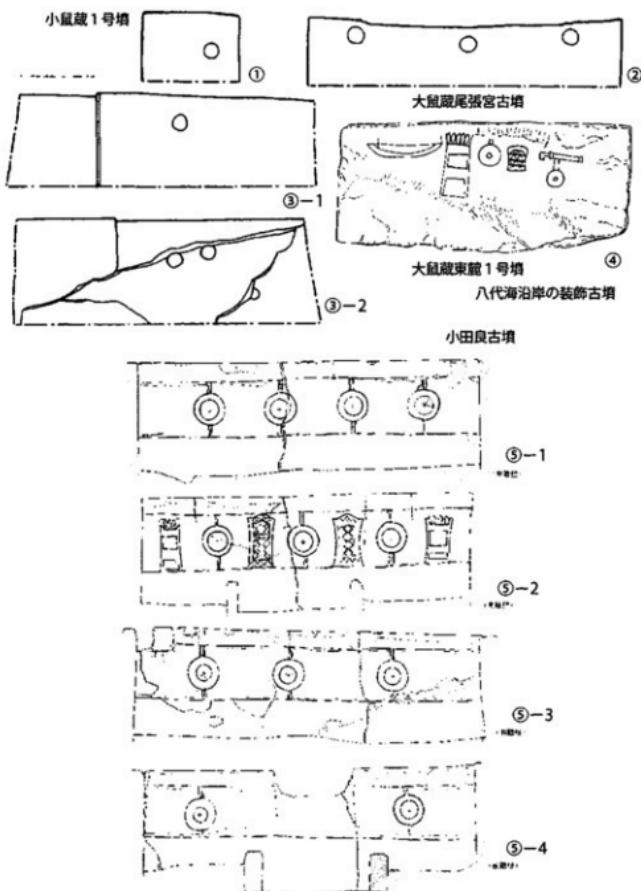


図3 八代海沿岸の装飾古墳及び小田良古墳の装飾文様

*本稿で使用する装飾文様は、①～④が高木正文氏論文（高木 1999）、
⑤、⑥が『熊本県装飾古墳総合調査報告書』（1984）のものを使用。

②小田良古墳の装飾文様にみる貝象絵柄の画一性と構図性

高木氏が、八代海沿岸の装飾古墳を受けて成立したと考えた小田良古墳の装飾文様を見てみよう(図3)。奥壁の石障には、石材上部に2本の平行線を刻んで、装飾文様の区画が設定され、その中に鏡、盾、鞍の浮彫が配置されていた(⑤-2)。また、その他の石障には、装飾文様の区画に鏡の浮彫が施されていた(⑤-1、3~4)。

配置では、いずれの石障も均等な貝象絵柄であったことが一目瞭然である(⑤-1~4)。そしてその中で、奥石障のものは、「鞍→鏡→盾←鏡←盾←鞍」という左右対称の構成をとった装飾文様(⑤-2)で、優れて規則的で、画一性があった。

次に、1段の横並び配置の装飾文様と八代海沿岸の装飾文様とを見比べてみると、小田良古墳の方に強い構図性を認めることができそうだ。例えば、八代海沿岸のものは、石材の上端に沿わせるかたちで、横並びの配置がなされていた。これに対して、小田良古墳は、区画の中軸線上に貝象絵柄をセンタリングさせた装飾文様だった。さらに興味深いのは、奥、左石障、手前の装飾文様の区画が繋がっていたことだ。これによって、すべての装飾文様は、一体性を帯びることになった。ここにも、高い構図性が読み取れるのである。

また、貝象絵柄の描画方法は、幅広くて深い、しっかりした浮彫で、丁寧な仕事ぶりであった。

③千金甲1号墳の装飾文様にみる抽象性の出現

高木氏が小田良古墳の後に続くと位置付けたのが、千金甲1号墳の装飾文様であった(図4)。奥壁の石障には、縦2段の鏡、鞍、2段のX字文が見られた(⑥-1)。また、その他の石障には、2段鏡の浮彫、2段X字文の線刻(⑥-2)が施されていた。ここで注意が必要なのが、小田良古墳で見られた盾が無いことであり、その一方でX字文が現れたことである。

配置では、いずれの石障も均等な貝象絵柄であったことが一目瞭然である。そしてその中で、奥石障には、2段鏡、鞍+2段鏡を交互に配置した装飾文様が見られた。その配置の状況は、「鞍+2段X字文→2段鏡→鞍+2段X字文→2段鏡→鞍+2段X字文→2段鏡→鞍+2段X字文→2段鏡→2段X字文」(⑥-1)であった。両端の装飾絵柄が異なっており、一部で画一性が崩れていたことがわかる。また、X字文と重なっていたのが鞍だけなのも重要な点。

左石障は、「2段X字文→2段鏡→2段X字文→2段鏡→2段X字文→2段鏡→2段X字文→2段鏡→2段X字文」(⑥-2)という左右対称の配置がなされて、画一的であった。右石障は、基本的に2段X字文と2段鏡を交互に配置していた。ただし、2枚の板石使用のためか、一部やや異なる絵柄配置が認められ、画一性が崩れていた。

次に、配置のされ方は、どの石障も、小田良古墳と同じように強い構図性があったようだ。2本を一对にした平行線刻が、石材長軸に沿って上下2段に引かれていた。奥石障での装飾絵柄は、2段鏡と2段X字文が一对の線刻の中にそれぞれ取り、一对の線刻を貫いて刻まれた鞍でも、部位ごとの收まりで貫通していた(⑥-1)。左石障では、2段鏡と2段X字文がそれぞれの一对の線刻の間に収まっていた。(⑥-2)

描画の方法は、幅広くて深い、しっかりした浮彫の小田良古墳の装飾文様とは異なり、太くて深い、荒々しい線刻による浮彫であった。そこに、丁寧な浮彫から荒い線刻による浮彫への表現手法の変化があったようで、ここにも、貝象絵柄の画一性の崩れが見て取れる。また、この崩れと連動したのだろうか、抽象性のある絵柄(以下「抽象絵柄」という。)のX字文と、彩色が現れていた。これらは、菊池川流域の装飾古墳を特徴付ける幾何学装飾絵柄の表現手法で、それらが装飾絵柄の変容と軌を一にして出現したことも興味深い。

(3) 塚坊上古墳にみる幾何学装飾文様の成立

塚坊主古墳(図4)を取り上げて、菊池川流域の装飾文様の成り立ちを検討したい。それは、円文と三角文を組み合わせた装飾文様で、新たに登場した家形石棺形の石壇形の内面に施されていた。

まず、配置である。石壇形の奥壁と左側壁を見ると、石材全体をキャンバスに見立てた装飾文様となっていた。その構成は、石材の中軸線を基線にして展開されていた。

中軸線上には、奥壁に3個の円文が均等に配され（7-2）、側壁中央に1個の円文が配置されていた（7-1）。描き手は、先ず中軸線を意識して、円文を描くことから始めたのだろう。その際に、奥壁と両側壁は一連の画面として認識されたようで、円文は屍床を囲むように均等に配置されていた。これらのこととは、円文が装飾文様の主文様だったことを教えてくれる。ただし、大きさは不揃いで、中軸線も円の中点を通るわけでもなかった（7-2）。このランダムな配置は、千金甲1号古墳に見られる具象絵柄の同一性の崩れの延長にあったのだろう。

円文を取り囲むように配置されたのが「角文」である。その配置は、中軸線を基線にして、三角文を組み上げたり、組み下げたりして展開されていった（7-1、2）。角文の大きさは不揃いで、また、二つの角文を繋いで四角形にしたものもあった（7-1、2）。それらの組み合わせは、これといった法則があるわけでもなく、ランダムに行われたようだ。この配置の仕方から窺われるのは、円文を画面の中心に据え、その周りの隙間を角文で埋めようとの意識の表れではなかったか、ということである。

描画の方法は、赤と白と黒の彩色であった。赤は、装飾絵柄の輪郭線と一部の三角文の塗り潰しに使用され、白は、円文と一つの三角文の塗り潰しに使われていた。黒は、顔料ではなかった。三角形や四角形の輪郭線を引いて、石材地肌の色で表現された。

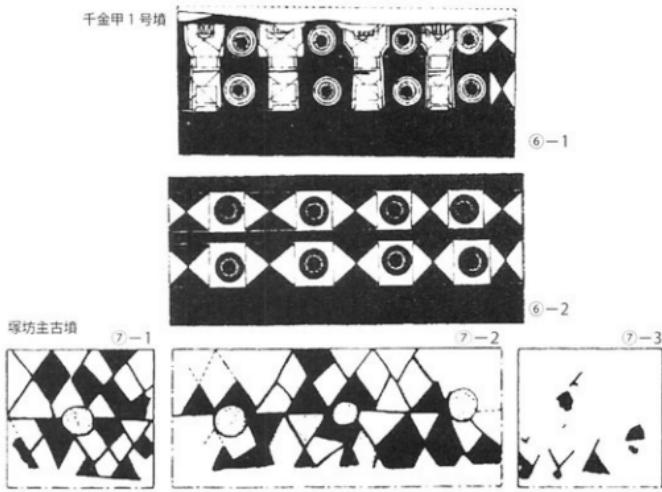


図4 千金甲1号墳と塚坊主古墳の装飾文様

3 菊池川流域装飾古墳の幾何学文の系譜

菊池川流域の装飾古墳の特徴の一つである円文は、八代海沿岸の装飾古墳に表現された鏡の具象絵柄に系譜が求められると考えられている。その間の過程は、線刻（八代海沿岸）から、幅広くて深い、しっかりした浮彫（小山良古墳）に、さらには太くて深い、丸々しい線刻の浮彫と彩色（千金甲1号墳）へと変容し、塚坊主古墳の主文様である彩色の円文につながっていったものだろう。

最初の八代海沿岸では、大鼠戻尾張宮古墳や小鼠戻3号墳、小鼠戻1号墳のように、鏡が単独で描かれた古墳がある一方で、大鼠戻東麓1号墳のように、刃や駄、三角板新留短甲と同じ、器物の一つとして表された古墳があった。次に続く小山良古墳は、この両方の扱いが一つの石室の中に収められた古墳だ。石障奥壁には、「駄・鏡・盾・鏡・盾・鏡・駄」の配列が描かれ、手前の壁と左右側壁には、鏡が単独で表現されていた。そして、さらに融合したものが、次の千金甲1号古墳だろう。石障奥壁には、「駄+2段X字文・2段鏡・駄+2段X字文・2段鏡・駄+2段X字文・2段鏡・駄+2段X字文・2段鏡・2段X字文」があり、左右側壁は、2段鏡と2段X字文が交互に展開されていた。

最初は別物として取り扱われた鏡と駄・盾だったが、時期が下るに従い、同じ石室の中に画面を代えて取り替り、さらにはすべて一緒に表現される、そんな変容の筋道が見て取れそうだ。塚坊主古墳の円文と△角文の一体性は、まさに、そうした変容の結果として現れたものに違いない。

そこで問題なのが、X字文は何物か、だろう。これに関して、白石氏は、「千金甲1号墳の石障の対角線が直弧文の省略形式であることも確か」（白石 1993）との見解を示した。この見解については、高木氏も同様の意見（高木 1999）であり、大方の見方だろう。だからといって、その見解の根拠に置いた「直弧文と鏡からなる避邪の文様は、石棺系や石障系の装飾古墳の基本的なモチーフとして用いられる。井寺古墳の石障の円文が鏡であることは今まででもなく」の前文には、謙か疑問を挿まるを得ない。何故ならば、高木氏発案（高木 1999）の、八代海沿岸の装飾古墳→小山良古墳→千金甲1号墳の変遷（図5）の中に、井寺古墳を位置付けることができないからである。そこには、別系統の装飾古墳である（図2）、との認識が肝要なのではなかろうか。しかも、千金甲1号墳の石障奥壁には、駄とX字文を重ね合せた表現が認められるものの、長砂連古墳や井寺古墳等には駄は描かれていません。白石氏の見解の評価に当たっては、未だ高木氏の編年案が出されていない頃のもの、ということに留意が必要だろう。

X字文を考える上でヒントとなるのが、駄と重ね合せた装飾絵柄だろう。そして、参考にすべきは、高木氏が千金甲1号墳の前に位置付けた小山良古墳の「駄・鏡・盾・鏡・盾・鏡・駄」の配列の装飾文様だろう。ヒントを参考に照らし合わせると、小山良古墳の駄、鏡、盾の中で、千金甲1号墳に具象的に表現されていないのは、盾ということが見えてくる。例えば、駄+X字文の装飾絵柄は、駄と盾を重ねた表現であり、盾を省略して成立したと理解できるのではないだろうか。また、X字文の装飾絵柄は、重ねた両方を省略した装飾絵柄であるとも理解できるのではないだろうか。要するに、千金甲1号墳の装飾文様は、盾が省略された「駄+2段X字文」と、両方が省略された「2段X字文」の案出によって成立したと考えてみてはどうだろうか。

菊池川流域の装飾古墳は、6世紀初頭に成立した（高木 1999）。それは、八代海沿岸から北上し、さらには有明海を北上した、鏡、駄、盾、短甲、刀剣の装飾絵柄の両一化、横団化、抽象化の方向性の終着形だったと思われる。そこには、まったく別物として描いていた器物を、最終的には主文様に据えた鏡と、駄と盾をデフォルメした△角文を含体させ、一体性を持たせて描いた装飾文様の成立があったと考えられる。言い方を換えれば、鏡と駄と盾の哲学をベースに据えながらも、簡略化を優先した描き手の考え方さえも窺い知れるのではないかだろうか。

白石氏は、「鏡も前期の古墳ではそれを本格のまわりにたて並べた例がいくつか知られており、これもまた邪惡なものを見る意味があった」（白石 1993）と指摘した。また、「（前略）武器・武具もまた邪惡の意味をもつもの」（白石 1993）とも理解した。

そんな哲学を大切に保持しながらも、自らの独創性を貫いた描き手の姿がイメージされてならない。



図5 装飾文様の変遷
*高木正文氏「肥後の装飾古墳」(『考古学ジャーナル』395、1995年)

4 わわりに

本稿では、菊池川流域の装飾文様の成立に絞って、私見を披瀝してきた。ところが、この地域の装飾古墳には、さらに追及すべき課題も残されている。例えば、6世紀の装飾古墳を見ると、筑紫の装飾古墳と類似した装飾絵柄がある。

チブサン古墳は、円文と三角文の組み合わせによる具象絵柄を基本とした装飾文様である。それは、石屋形の奥壁と左側壁にあり、塚坊主古墳の次に来る装飾文様と考えられる。ところが、石屋形右側壁には、塚坊主古墳に見られなかった装飾文様が描かれていたのである。その装飾絵柄は具象絵柄で、王冠を被った人物像、刀剣、盾があった(図6)。しかも、人物像は、八代海沿岸の古墳などの具象絵柄には描き出されていなかったものだし、刀剣や盾であっても、菊池川流域では抽象化されてしまった装飾絵柄である。従って、八代海沿岸から始まる装飾古墳の伝統に遡及させることは、なかなか難しいものである。このことについても、課題として取り組むべきことだろう。そのために、装飾文様の移り変わりをデザイン的に眺めてみることも一興だろう。

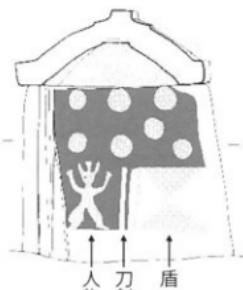


図6 チブサン古墳の具象絵柄

あれは確か、高木正文氏が「肥後における装飾古墳の展開」を『国立歴史民俗博物館研究報告』に書いていたか、書いた頃のことだった。「縄文土器の文様の変化を辿るようすれば、装飾古墳は編年できるよ」と聞かされたことを覚えている。その時には、あまりピンとはこなかったのだけれども、その時、「装飾文様を描き手の面から見つめれば、確かにそうだろうな」との感想を持ったものだ。そしてその後装飾古墳館で勤務することになり、その問題に取り組むことができた。おそらく、高木氏の認識を超えるものは今後も出てこない、と思わせるほどに、完成された編年であり、解釈ではなかろうか。そんな高木氏の仕事に敬意を払いつつ、本稿を締めたい。

註

- 1) 本稿で使用する装飾絵柄は、装飾古墳の装飾を構成する、一つ一つの絵柄である。例えば、鏡や鞆、盾、太刀などの器物もあるし、円文や三角文などの幾何学文の一つ一つもそれである。
- 2) 本稿で使用する装飾文様は、装飾古墳に描かれた装飾の全体を指し示して使用している。何の修饰もなければ古墳自体の、○○奥壁の装飾文様といえば、限定した部位の装飾全体を示している。
- 3) 伝統については、辞典（ブリタニカ国際大百科事典）にある「一般に思想、芸術、社会的慣習、技術などの人類の文化の様式や態度のうちで、歴史を通じて後に伝えられ、受継がれていくものをいう。またある個人または集団、時代などの特性が受継がれていく場合をいうこともある」との意を踏まえて使用している。古墳を装飾する行為が受け継がれていた歴史的事実を、「装飾古墳伝統」もしくは「装飾古墳文化」と呼称できるものと思うが、本稿では前者を使用した。
- 4) 装飾文様や装飾絵柄の観察に当たっては、熊本県立装飾古墳館で常設展示しているレプリカを対象にした。正確な復元であり、本論の趣旨のために有意な研究対象である。
- 5) 石材上縁の形状に規制されるのも、彫り手の意図であることには変わりはない。ただし、本稿では、規制のままにというよりも、別のこだわりを持ったことを評価の中心に据えた。
- 6) チブサン古墳の盾の絵柄は、X字文である（図6）。盾がXとして表現されることの好例だと評価している。

引用・参考文献

- 木崎康弘 2014 「肥後の装飾古墳と菊池川流域」『熊本の古墳文化と鞠智城—菊池川流域の古代文化—資料集』、明治大学日本古代学研究所、pp.13-34。
- 木村龍生 2014 「古墳時代中期における菊池川流域勢力の動向—江田船山古墳を中心にして」『熊本の古墳文化と鞠智城—菊池川流域の古代文化—資料集』、明治大学日本古代学研究所、pp.1-12。
- 白石太一郎 1993 「装飾古墳へのいざない」『装飾古墳の世界 図録』、国立歴史民俗博物館、pp.11-15。
- 杉井健 2014 「第4章 まとめ 図57 熊本県地域における首長墓系譜」『長財古墳の研究 有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究』、熊本大学、p.87。
- 高木正文 1999 「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』80、国立歴史民俗博物館、pp.97-150。
- 高木正文 2002 「菊池川流域の装飾古墳」『東アジアと江田船山古墳』、雄山閣、pp.155-166。
- 宮澤卯一郎 1967 「宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獣鏡」『熊本史学』33、熊本史学会、pp.44-5。

熊本県内に残る津波碑の悉皆調査の取り組みについて

九州国立博物館と九州・山口ミュージアム連携事業「みんなをまもるミュージアム」の2年間

装飾古墳館 学芸課長 坂口圭太郎

1 はじめに

阪神淡路大震災と東日本大震災、二つの広域的かつ大規模災害を経験した全国にある博物館、美術館では、今後も想定される大規模災害に対応する組織づくりや文化財レスキューの人材育成などの必要性が叫ばれてきた。

このような状況で、九州国立博物館と九州・山口にある博物館・美術館が共に手を携え、平成26年度から文化庁の補助を受け「みんなをまもるミュージアム」事業を開始した。

本事業は九州国立博物館と長崎県文化振興課に事務局を設置し、ミュージアム運営に関わる学芸員のみならず、事務職員やボランティアスタッフと地域にすむ市民が、かつて大規模災害を経験した地域に赴き、現地調査や文化財レスキューの現場を視察することで、ミュージアムを核とした文化財の防災・危機管理力を高めることを目的としている。



NPO法人沿岸歴史資源保全ネットワークによる文化財レスキューの取り組み

2 みんなをまもるミュージアム事業について

(1) 事業の体制

平成26年度は、文化庁の補助事業である地域と共に働いた美術館・歴史博物館創造活動支援事業「みんなをまもるミュージアム」として実行委員会形式で活動をおこなっている。九州国立博物館長を委員長とし、副委員長を長崎県文化振興課長が務める。

また九州国立博物館の学芸部ほかと九州各県の文化行政を担う課長で委員会が構成されている。事務局は九州国立博物館と長崎県文化振興課が務める。本委員会の下に事業ワーキング会議があり、各県の博物館、美術館の学芸課長及び課長に相当する職員が企画等に協力している。

併せて、協力者会議が設置され文化財などの防災・減災に取り組んでいる団体や研究機関等から本事業へ協力頂いている。平成27年度は、文化庁の補助事業地域の核となる美術館・博物館支援事業「みんなをまもる文化財みんなをまもるミュージアム」として、前年度の体制で活動している。

(2) 平成26・27年度の取り組みと今後について

平成26年度は、3回の全体会議と3回の調査・情報収集と1回の研修会を実施した。全体会議では、広域的な災害に対する備えとして、文化財レスキューのための基金や各県間での協定について検討を重ねた。調査・情報収集では、阪神淡路大震災以降の防災に関する危機管理の在り方などについて情報収集に努めた。研修会では、水道資料吸水乾燥ワークショップと古文書整理ワークショップを実施した。

続く平成27年度は前年度に引き続き、全体会議と調査・情報収集を進めている。平成28年1月25日には、九州国立博物館において公開シンポジウム「地域と共に考える文化財の防災減災」Ⅱとして、本事業に関わる基調講演や事例報告が行われた。

なお、本事業は平成28年度が最終年度である。最終年度の事業としては、これまで試行してきた研修会を九州各県の拠点となる博物館・美術館において実施する事や九州における広域的かつ大規模災害が発生した場合の文化財レスキュー体制づくりを進める事を目的としている。

3 熊本県内に残る津波碑の悉皆調査について

本ミュージアム連携事業でも、文化財レスキューにあたっては、半時における文化財の悉皆調査の重要性が常に指摘されている。広域かつ大規模な災害が発生した場合、被災地にある文化財の正確な位置や情報が無ければ、文化財をまもる事は困難である。

本事業のワーキング委員として、今後想定される広域的かつ大規模な災害に対する備えとしての文化財の悉皆調査を検討する中で、過去熊本県内で発生した大津波に関わる碑の悉皆調査を実施することとした。

熊本は遼浅の干潟を利用した干拓地広く行われており、この大津波で甚大な被害を受けている。この津波に関する碑の悉皆調査では正確な位置図を作成し、過去の被害状況を調べ上げるとともに、碑を後世に確実に残していくことを目的とした。なお本調査は熊本城調査センターの美濃口雅朗氏と天草市文化課の松本博幸氏並びに本稿の執筆者である坂口で取り組んでいる。

4 「島原大変肥後迷惑」の津波碑からみえてきたこと～悉皆調査の重要性～

(1) 悉皆調査の目的

近年相次いで起こった広域かつ大規模災害において、被災地に存在した多くの貴重な文化財が失われる中、文化財レスキュー活動によって、その地域のアイデンティティーが見直され、地域のコミュニティーが再生された事例がある。地域にある文化財を守るために、まず取り組むべき事は文化財の「悉皆調査」である。それは近い将来に想定される広域かつ大規模な災害に対応し「そこにある」身近な文化財の位置や情報をくまなく記録することで、一つでも多くの文化財をレスキューすることに繋がっていく。



写真 東京大学地震研究所所蔵

そのような状況下で「島原大変肥後迷惑」と呼ばれている、島原半島の雲仙岳山崩れにより引き起こされた津波¹⁾による歴史を記録する「津波碑」の悉皆調査²⁾を始める事とした。

これまで郷土史や災害調査報告などで、断片的に取り上げられてきた、これらの「津波碑」をあらためて調査する中でいくつかの重要な課題がみえてきた。

(2) 熊本県内に残る「津波碑」について

「島原大変肥後迷惑」(寛政4年(1792))の雲仙噴火岳山崩れに伴う大津波被害は、対岸に位置する天草諸島や熊本平野の沿岸部に及んだ。特に狭い入り江では、津波が高さ20mを超える甚大な被害を与えた。また干拓地は低地のため、津波による浸水が広域に及んでいる事が分かっている。

この時の大津波に関連する「津波碑」を調査する中で、各地に残る、それらの碑が、単なる記念碑ではないことが分かってきた。今まで津波供養碑や津波教訓碑などに分類されてきていたが、ここでは大きく4種類³⁾に分けていく。

一つには「津波供養碑」である。これは津波の犠牲になった人々を供養するものである。

玉名市岱町の「扇坂千人塚」や宇土市白石町の「寛政の津波供養碑」は別名を「一部一基の塔」と呼ばれ、肥後藩が公的に建立したものである。このほかにも、熊本市河内町の蓮光寺山門横の供養碑⁴⁾には「南無阿弥陀仏 潟死墓」と刻まれており、Ⅱ船津村、白浜村、河内村、近津村で合わせて765人が亡くなったことが記されている。また溺死墓との記述からも、集団墓の意味合いを持っていると考えられる。

もう1基紹介する。天草市五和町三江の供養碑⁵⁾である。2基あり、右側の供養碑は、追善供養で建てられた可能性がある。この地域は直接的には、津波の被害が及ばなかったエリアであると考えられている。ではこの供養碑が建てられた理由はなんであろうか。その答えとして、津波の被害者が漂着した場所にあたり、地元の方々が懇ろに弔うために建てられた可能性が指摘できる。



写真2

この地域は直接的には、津波の被害が及ばなかったエリアであると考えられている。ではこの供養碑が建てられた理由はなんであろうか。その答えとして、津波の被害者が漂着した場所にあたり、地元の方々が懇ろに弔うために建てられた可能性が指摘できる。

二つには「津波教訓碑」である。熊本市河内町船津の「教訓碑」⁹⁹⁾は四面にそれぞれ教訓が刻まれており「後の世に同じような津波に襲われた時は、子どもの手を引き、老人を背負い、財産は打ち捨てて、避難を優先し、平時から迷子道を確保しておきなさい」等の教訓が記されている。また当時の民衆が読めるように教訓は平假名で記載されている事にも注目したい。



写真3

「つめに『津波石』あるいは『津波境石』等と呼ばれるものがある。宇城市三角町大多邑にある『津波境石』¹⁰⁰⁾である。この自然石は標高約22.5mの高さにあり、この地域で津波が達した最も高い箇所に目印として置かれたものである。『津波境 寛政4年四月朔日戊刻 山本十七全助立之』と刻まれている。この『境石』がある場所は現在の集落の上で、岬の際にあり、ここまで浸水が及んでおり、そうなると眼下にある集落は、ほぼ全てが津波にのまれたことになり、当時の津波の恐ろしさがあらためて理解できる。

このような『津波石』は熊本県内各地にあり、天草市有明町島子にある「いしほとけ」¹⁰¹⁾もこの津波で沖から運ばれてきたとされている。つまり、この『津波石』は寛政4年の津波の到達点を示す指標である。

以上は、津波に対する教訓を語り継ぐもの、あるいは、津波によって犠牲になった人々の魂を慰めるものであり、またかつての津波の到達点を示すことことで、後世の人々をこのような災害から守るためにものとして残されてきた。



写真4

では最後の一つは、どのような目的で作られ残されて来たのか。

それは「墓」である。天草市五和町黒崎海岸の「供養碑」¹⁰²⁾は墓でもある。もともと供養碑と呼ばれてきたこの碑は自然石を利用している。海岸からほど近い砂丘に建てられたこの碑は、他の供養碑や教訓碑と異なり、銘文が確認できない。この悉皆調査の聴き取り時に地元の方から貴重なお話が聞けた。それは昭和20年代で戦後間もなく食料増産のために、この碑の周囲を掘削したところ、白骨化した人骨を掘り当てたそうである。この方が青年の頃で、かつての大津波で流されてきた溺死者を碑の周辺に埋めたと聞いており、その伝承が正しかったことをその時理解したそうである。また今から十数年前までは、対岸の島原から、墓開拓がこの碑を訪れていたと証言を得た。

以上が、熊本県内における「津波碑」の悉皆調査の概要報告をまとめたものである。

熊本県内における津波碑の悉皆調査¹⁾の取り組みは始めたばかりであり、今後の調査体制づくりに課題を残しているが、県内にあるとされる70基余りの「津波碑」のすべての位置や現況の記録を、今後数年内にまとめる予定している。

最後にまとめとして、津波碑の悉皆調査で見えてきたことについて述べる。



写真5



写真6



写真7

津波碑の「悉皆調査」では、各地に残る津波碑の詳細な記録保存は当然ながら、出来る限り、地元の方々への「聞き取り」が必要である。今回の悉皆調査においても、現在も引き続き「島原大変肥後迷惑」で亡くなった方々への慰霊祭を継続している地区が複数あることが判明した。

津波碑は先人たちが経験した多くの苦難を語り継ぐことの大切さを今に語りかけている。今に残る津波碑は市民と過去を結ぶ「心の架け橋」となっている。

このように長年にわたり「津波碑」を守り伝えてきた地域の人々へ感謝と畏敬の念を込めて、この大津波の被災者へ追悼としたい。



写真8

註1) 本調査では眞口日が全体調査計画の立案を、美濃口日氏が津波碑の形態調査と碑文の解説、松本氏が天草における津波関連の文献及び資料の収集と天草にある津波碑の事前調査を主に担当している。

註2) 美濃口雅朗氏は、この分類を更に個人と公あるいは寺等による供養に分けて、碑の意味を考えなければならないとしている。

註3) 悉皆調査に於いて、地元への聞き取り調査は重要である。但し、記憶や伝承であるため、慎重な裏付け調査は必要である。

平成 27 年度熊本県立装飾古墳館モニタリング報告

装飾古墳館学芸課 福田正朗・坂口圭太郎・伊藤幸子・菊川知美
はじめに

熊本県内は主要な国指定史跡、県指定史跡の装飾古墳が多数、所在している。長年、熊本県立装飾古墳館では、これらの装飾古墳を対象とした環境調査を継続して実施してきた。これまでの調査成果は、菊池川流域の装飾古墳の半時公開に反映され、現在の熊本県内装飾古墳一斉公開へと連動している。

蓄積されたデータは、長いところでは 9 年間に及ぶ。気象観測データ、装飾古墳内部の温湿度環境を考慮することにより、保存と活用のバランスの堅持に必須のものとなりつつある。

1. 調査方法

(1) 報告対象：古墳館が環境調査を実施した 3 つの装飾古墳保存施設（第 1・5 図）について、報告する。山鹿市に所在するチブサン古墳（国指定史跡）、弁慶ヶ穴古墳（国指定史跡）、装飾古墳隣接地に移設復元した横山古墳（未指定）の 3 か所である。

(2) 調査方法：装飾古墳保存施設内を中心に、温湿度の計測を行っている。調査目的は、①保存施設の基本的な性能を見ること、②活用時の施設に与える影響を見ることの 2 つである。

① 1 時間間隔での温湿度計測を実施した。使用機種は応答速度が比較的遅いが、屋外使用に適する、Onset 社 HOBOprov-2U23-001 を使用、結露水の影響が考えられる箇所では必要に応じてシールド（Onset 社 RS-1）を併用した。設置期間は通年とし、継続して計測している。

横山古墳については、② 凡そ 5 分という見学者の平均的な滞在時間を目安に、5 分間隔での温度計測を実施した。使用機種は、応答速度の速い Onset 社 HOBOprov-2U23-004（外部温度センサー付）、



第 1 図 ① 山鹿市チブサン古墳、② 弁慶ヶ穴古墳、③ 熊本市横山古墳 ★は装飾古墳館

JAXA 提供「AW3DTM（全世界デジタル 3D 地形データ）」をカシミール 3D で加工

一部で同 U23-002 (外部温湿度センサー付) を使用した。3つの古墳で得られた通年の温度データ、横山古墳は、公開時の温度データ（公開前後7日間）を示す。

2. 結果

(1) チブサン古墳

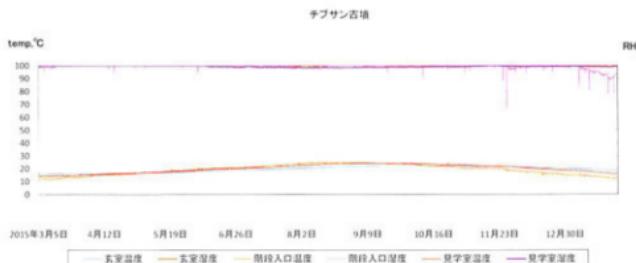
チブサン古墳は、6世紀前半ごろの築造と考えられる前方後円墳であり、一般公開を行っている。通常、山鹿市立博物館の開館日、午前10時と午後2時の一般公開時は、見学室では1°C～2°Cの温度上昇がみられる。その後、蓄熱は概ね、数日で解消される。

この為、入室の影響がほとんどない優秀な保存施設という意識を潜在的に持ちやすい。しかし、入室による影響は未知数であり、例えば大規模な公開と、連日の數人単位での小規模公開では、蓄熱の影響が全く異なることが判明している（2012 肥後古代の森）。

チブサン古墳の見学室を兼ねた横穴式石室前室部分（以下見学室とする）は、特徴的な長い階段のある通路により、外部と階段入口につながっている。見学室と階段入口付近において、温度差が生じやすい。2014年春は、見学室の温度上昇が収まるのに2週間程度を要した。この為、カビや塙類の発生するリスクが高まったことにより、装飾の保護を第一に考え、2014・15年度、山鹿市教育委員会は一斉公開への参加を見合わせた。そして、2014年からは一般公開時の温・湿度変化の有無を把握する為、通年のデータ計測を、装飾のある玄室内で開始した。

第2図のデータ解析からは、以下の点が指摘できる。見学室の温度上昇は、これまでのデータ計測や報告と同様の傾向、つまり、一般公開時、温度上昇がみられるが、数日で解消されている。見学室と階段入口付近との温度差が生じているが、やはり、特徴的な長い階段のある通路の影響が強いと判断されている。また、見学室、階段入口付近については、夏季の外気温度の上昇に伴い上昇傾向にある。階段入口が8月23日に最高温度24.99°Cを計測するに対し、見学室は9月1日に最高温度24.26°Cを計測している。最高温度に達するピークは、1週間程度の時間差が認められる。

見学室と比較し、石室の天井高が高くなる玄室はどうか、年間を通じて温度は100%を維持していることが理解できる。温度は、10月5日に最高温度22.44°Cを計測している。玄室の最高温度に達するピークが、見学室及び階段入口よりも遅れる傾向にある。



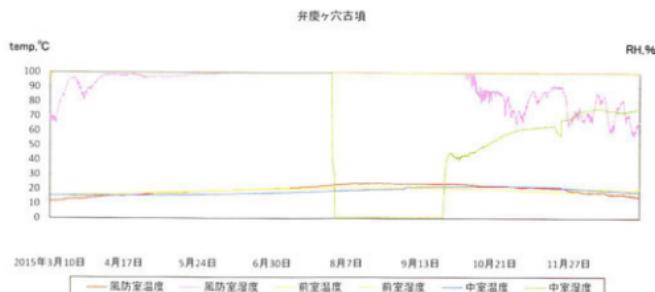
第2図 チブサン古墳の温・湿度推移

(2) 弁慶ケ穴古墳

弁慶ケ穴古墳は、6世紀後半ごろの築造、現状では円墳と考えられる。昭和50年度に保存修復工事を行い、保存施設を有している。現在、一般公開を行っていない。前室の入口部分に観察用のガラス窓を有している（2015装飾古墳館研究第11集）。平成26年3月から通年の温度データ計測を開始した。結果を第3図で示した。

データ解析からは、以下の点が指摘できる。風防室の最高温度のピークは、8月23日の24.31°Cであった。風防室はステンレス製の外・中扉を有する。外気の温湿度の上昇及び下降の影響を軽減する効果があると推測されるが、他の部屋よりも外気の影響を受けやすいと理解できる。3月下旬から4月上旬にかけての風防室の温度上昇、11月下旬以降の風防室の温度下降、そして、風防室の湿度の変遷は、外気変化の作用を如実に示している。

また、前室の最高温度のピークは、8月9日の21.19°Cであったが、湿度は年間を通じて100%を維持している。ところが、右室の天井高が高くなる中室をみれば、中室の最高温度のピークは、10月20日の21.98°Cであった。なお、中室湿度については、7月30日から9月25日については、結露水の浸透によるノイズが生じていると考えられるが、前室よりも乾燥傾向にあると指摘できる。ただし、湿度については、年間を通じたデータが不足しており、今後も注視する必要がある。



第3図 弁慶ケ穴古墳の温・湿度推移

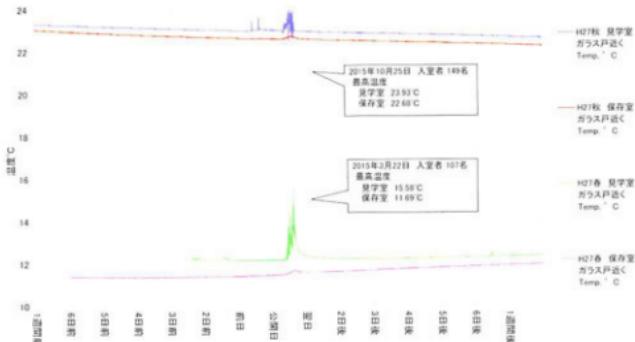
(3) 横山古墳

横山古墳は、6世紀前半ごろの築造と考えられ、双脚輪状文を有する小型の前方後円墳である（熊本県立装飾古墳館2015）。九州縦貫道自動車道路の植木インター付近にあった装飾古墳で、九州縦貫道建設事業において発掘調査が行われた。その後、平成6年に装飾古墳館の隣接地に移築復元された。これまでのモニタリングにおいて、横山古墳の保存室の温度変化は約1か月程度、外気の変化よりも遅れる傾向にあることが分かっている。埴丘に芝張りがなく、外気の影響を受けやすいことが要因と考えられる（肥後古代の森2015）。

なお、風防室と見学室にはエアコン機能があるが日常的には作動させていない。この為、外気との温度差が大きい時期については、原則、公開は控えている。第4図のデータ解析からは、以下の点が指摘できる。2014年秋の公開において、入室者は74名であった。見学室の最高温度は23.57°C、保存室の最高温度は22.71°Cであった。この時、見学室において、室内する職員が不快に感じた場合、エアコンのドライ送風を行った。その結果、見学室の蓄熱は1日で解消された。エアコン及び送風機能の使用が効果的であったと判断される。

2015年春の公開では、入室者107名、見学室の最高温度は15.58°C、保存室の最高温度は11.69°Cであった。エアコンは使用しなかったが、見学室の温度上昇は2日程度、保存室の温度上昇は1日程度で解消した。2015年秋の一斎公開では、入室者149名、エアコン及び送風機能を適宜、使用した。見学室の最高温度は23.93°C、保存室の最高温度は22.68°Cであった。見学室及び保存室の温度上昇は1日程度で解消しており、2014年秋同様、エアコン及び送風機能の使用が効果的であったと判断される。

横山古墳 2015年春・秋の一齊公開前後温度



第4図 横山古墳の温度推移

3. 考察

チブサン古墳（国指定史跡）、弁慶ヶ穴古墳（国指定史跡）、横山古墳（未指定）について、報告した。特に、横山古墳については、2015年春、2015年秋の熊本県内装飾古墳一齊公開前後の温度データを加味して提示、報告した。以下、この報告に基づき、考察を加える。

通常、公開時の装飾古墳における温度上昇は、多くの古墳で認められる。その温度上昇には古墳によって異なるが、概ね、1°C～2°Cの差がある。

参加者が100名を超す等、入室の影響が避けられない場合、はじめて入室の制限（公開時間の短縮、連続公開の回避、見学者の人数及び時間制限など）を検討する必要がある。現在、一時的な入室禁止を保存措置としている装飾古墳は多い。本報告で取り上げたような大規模公開に踏み切った装飾古墳では、公開と保存のバランスを具体的にどのように保つか、恒常的な課題といえる。古墳の見学に適した環境が、古墳の保存に最適な環境であるかは、継続的に追及される必要がある。

今回、報告した弁慶ヶ穴古墳は、現在、一般公開を見合わせている。一般公開しているチブサン古墳、横山古墳と同様、肥後地域の後削古墳の理作施設である石屋形を有する。横山古墳は、装飾を有する石屋形を保護する形でガラス窓で仕切る構造である。現在、見学者が保存室に立ち入ることは行っていない。

チブサン古墳については、石屋形のある玄室は見学室及び階段入口の温度上昇と比べて、変動の幅が抑えられていることが明らかとなった。一般公開による温度上昇の影響はほとんど認められない。湿度も公開の影響で変化することはなかった。ただし、一齊公開に参加した2014年春は、階段に見学者を滞留させたこともあり、見学室の温度上昇が取まるのに2週間程度、経過した。この際、温度上昇により、カビや塩類の発生のリスクが懸念された。

今後、古墳見学に際しては、入室前に古墳の説明を行い、質疑応答は古墳外で対応すること、階段及び見学室に一度に入室する人数を十分に考慮すること、また、階段周りの空気を扇風機で循環させることを要望したい。

この他、チブサン古墳、弁慶ヶ穴古墳については、各室が最高温度に達するピークがずれることを提示できた。このピークのずれと石室高との相関は、現在の石室環境等を理解する為、今後、重要な着眼点になると予測する。

チブサン古墳 保存施設模式図



井慶ヶ穴古墳 保存施設模式図



横山古墳 保存施設模式図



第5図 装飾古墳保存施設の模式図



第6図 横山古墳の一斉公開で説明する古墳館職員

謝辞 以下に記した各機関、個人の方々には、今回、報告した装飾古墳館のモニタリングにおいて、大変、お世話になりました。お名前を記して感謝いたします。

山鹿市教育委員会、佐治健一、塙本昇大、山口健剛（敬称略・五十音順）

文献

熊本県立装飾古墳館 2015「企画展IV 双脚輪状文の交流—装飾古墳の双脚輪状文と和歌山県岩橋千塚古墳群出土脚輪を考える—」

肥後古代の森協議会 2012「活動報告文集」

2015「活動報告」

平成 27 年度熊本県立装飾古墳館で開催した企画展

「鹿角製品が語る装飾古墳展～国越古墳出土遺物から見た東アジアの地域間交流～」

会期 平成 27 年 1 月 20 日（火）から平成 27 年 5 月 10 日（日）まで

会期中入館者数 15,527 人

装飾古墳の装飾文様に鹿角が表現されていることを紹介し、人びとと鹿の古代からの関わりを知つてもらうことが目的でした。また、鹿角製器具が出土した国越古墳出土遺物については、古墳館で保管する土器、玉類、鉄器、青銅器を展出し、当時の東アジアの地域間交流を思い描いていただくことを趣旨としました。

I 「装飾古墳館珠玉の收藏品」展①

会期 平成 27 年 6 月 2 日（火）から平成 27 年 6 月 28 日（火）まで

会期中入館者数 603 人

装飾古墳館は、装飾古墳、古墳時代の専門館ですが、绳文時代から中・近世、現代の資料を長年に渡り、収集、保管してきました。今回、開館以来、これまで常設展や企画展あまり紹介してこなかった資料について、装飾古墳館珠玉の收藏品展と題して紹介しました。

II 「平和への誓約（うけい）」展

会期 平成 27 年 7 月 14 日（火）から平成 27 年 9 月 13 日（日）まで

会期中入館者数 4,235 人

戦後 70 年が過ぎ、現在の日本において「平和」という言葉は、日々の暮らしの中で、当たり前のこととして受け止められています。本展示は、改めて平和の尊さを思い起こして頂くため企画しました。

III 「鹿高博物館 in 古墳館～考古ボーイ・ガールたちの今・昔～」展

会期 平成 27 年 7 月 28 日（火）から平成 27 年 9 月 27 日（日）まで

会期中入館者数 5,219 人

地元にある熊本県立鹿高高等学校考古学部の 60 年以上にわたる活動、現部員による「鹿高博物館」の取り組みを紹介しました。貴重な過去の遺跡を守ろうとした高校生たちがいたことを知つていいただく機会となることを趣旨としました。

IV 「双脚輪状文を考える－装飾古墳の装飾文様と和歌山県岩橋千塚古墳出土埴輪を考える－」展

会期 平成 27 年 10 月 6 日（火）から平成 28 年 1 月 17 日（火）まで

会期中入館者数 9,056 人

現在、日本国内では 660 基の装飾古墳が確認されており、装飾には多様な文様が存在します。特に、その一つ、双脚輪状文は希少な文様といえ、現存するものは九州に集中します。和歌山県岩橋千塚古墳群出土の双脚輪状文形埴輪、装飾古墳の双脚輪状文を検討することにより、米館者の皆様にとって、装飾古墳の歴史を知つていただく機会となることを趣旨としました。

V 「原口文庫Ⅲ 近世肥後の庶民の生活」展

会期 平成 28 年 2 月 9 日（火）から現在会期中

装飾古墳館では、初代館長であった故原口良之氏が長年にわたり収集した書籍、古文書、考古資料からなる「原口文庫」を保管しています。今回は、近世文書を通じて、近世肥後の庶民の生活を紹介しました。

研究紀要第 12 集

編集・発行 熊本県立裝飾古墳館

〒 861-0561

熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話 0968-36-2151 (代)

FAX 0968-36-2120

印 刷 有限会社 ソーゴーグラフィックス

発 行 日 2016 年 3 月 11 日

発行者：熊本県立装飾古墳館

所属：教育総務局文化課

発行年度：平成 27 年度

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 研究紀要 第 12 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県立装飾古墳館研究紀要 第 12 集

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日